

編集・発行
熊本県博物館
ネットワークセンター
宇城市松橋町豊福 1695
TEL 0964-34-3301
2019年3月5日

熊本の自然と文化

熊本県博物館ネットワークセンターだより



イベント情報 (平成31年1月～4月)

1 第5回企画展「くまもとの水辺の植物」 開催中です

水が豊富な熊本県に生育する水辺の植物にスポットを当て、水辺の環境に適応した姿や生き方を紹介しています。

○開催期間

2019年3月17日(日)まで

※月曜は休館

○会場

熊本県博物館ネットワークセンター 企画展示室



ガマ(抽水植物の一種)

2 第6回企画展「金峰山の地質」 開催のお知らせ

熊本市の西にそびえる^{きんぼうざん}金峰山。金峰山が火山であることはあまり知られていません。現在の金峰山がどのような過程を経て形成されたか、金峰山とその周辺の地質を紹介しながら、太古に思いをめぐらしましょう。

○開催期間

2019年3月26日(火)～5月26日(日)

※月曜(祝日の場合は翌日)は休館

○会場

熊本県博物館ネットワークセンター 企画展示室

○関連企画

展示解説を4月28日(日)午前10時30分から行います。



金峰山(一ノ岳)



一ノ岳をつくる安山岩(火山岩)

センターからのお知らせ

「フィールドミュージアムへ飛び出そう！」へのご参加ありがとうございました。

今年度は「地層と化石を観察しよう」をはじめ、9回のフィールドミュージアムを開催しました。合計で延べ244名の方が参加していただき、熊本の自然の素晴らしさや不思議さに触れることができたのではないのでしょうか。来年度も同様に、県民の皆さんに熊本の自然の素晴らしさや不思議さをお届けできるプログラムを計画してまいります。多くの皆さんの申し込みをお待ちしています。



今年度の活動の様子です
(左：落ち葉図鑑を作ろう、右：地層と化石を観察しよう)

ミュージアムパートナーになりませんか？

現在、ミュージアムパートナーズクラブ(MPC)として8つのグループが活動しています。県内の各地に出かけ、観察や採集を行うグループもあれば、当センターを中心に地域の歴史などについて学びながら交流を深めるグループもあります。会員の中には専門的に詳しく説明・解説をしていただける方もおられるので、「知らないから」、「難しいから」という考えは一旦置いて、気になる活動に参加してみませんか。

詳しくは、博物館ネットワークセンター(電話0964-34-3301)へお問い合わせ下さい。



多くの方がさまざまなMPCで活動しています
(左：草木染めの会、右：貝類調べ隊)

No. 219
民俗

みずだる
水樽

樽は、酒、醤油、味噌、漬け物など、液体や水気の多いものの運搬・貯蔵に用いる木製容器です。当初は木をくりぬいた入れ物であったようですが、やがて、細長い板を円筒形に並べて『たが』で締め、蓋と底板を取り付けたものが一般的となりました。同じ製法で作られる桶と見た目は似ていますが、樽には鏡と呼ばれる本体と一体となった蓋が付く、板目^(注1)で割った板を使う、などの特徴があります。

樽は用途に応じて様々な形のものが作られ使われていました。写真の樽はミズダル（水樽）と呼ばれ、農作業や山仕事などに持ち運ぶ水入れとして使われていたものです。冬場には湯を入れていくのでユダル（湯樽）と呼ぶところもあります。これには約四升の水が入ります。蓋は外れませんが注ぎ口があり木の栓がついています。また、角状に伸びた左右の側板に横木の取手をつけて持ち運びしやすいようにしています。水気を吸った木が膨張して壊れないよう、また野外での使用に耐えられるよう、太めのたがをいくつも締めて頑丈に作られています。このような軽量で持ち運びしやすく大量の水を運べる容器は、野外での長時間の作業には欠かせないものでした。（迫田久美子）



ミズダル 球磨郡あさぎり町 昭和初期
23 × 23 × 36cm

(注1) 丸太を年輪に沿って湾曲した鉋で割ったもの。木目は山形や不規則な波形となる。丈夫で水分が浸透しにくい。

No. 220
動物

キシマミドリシジミ *Thermozephyrus ataxus* (シジミチョウ科)

キシマミドリシジミは、翅を広げた長さが4cm弱の大型のシジミチョウです。国内では神奈川県以西の本州・四国・九州にやや局地的に分布していますが、九州では比較的産地が多く、「キシマ」の名も国内で最初の発見地である霧島山に由来します。

本種を含むミドリシジミ亜族のチョウは「ゼフィルス」と称され、その美しさから愛好家の多いグループです。中でも本種は写真1のように♂と♀とで色彩が全く異なる上、それぞれが抜群の美しさを持っています。

本種は、幼虫が主にアカガシ（ブナ科）の若葉を食べて育つため、成虫もアカガシ林で見られます。ただし、産地・個体数とも決して多くはなく、成虫が見られるのは7月頃の短い期間で、さらにアカガシ林の高いところを高速で飛び回るため、闇雲に成虫を探しても見られる可能性はほとんどないと言えるでしょう。

本種は卵の確認が比較的簡単で、アカガシの低い位置にある芽の基部に産み付けられています（写真2）。秋～冬の間には卵を確認しておけば、同じ場所で成虫を見られる可能性が格段に上がりますし、新産地も開拓できるかもしれません。（中菌洋行）



写真1 キシマミドリシジミ成虫（山都町産）



写真2 アカガシに産み付けられた卵（南小国町）

No. 221
歴史

わんからしん
穹窠羅針（宇城市小田家資料）

この資料は、他にも小方位盤や小方儀とも呼ばれ、また使用する際に杖を差し込んだことから杖先羅針とも呼ばれます。江戸時代末期に地方へ普及し、明治初期まで土地の測量で方位を測定するのに用いられていました。

外見上の特徴は、支柱を傾けても羅針盤が自動的に水平となるように円状の金属軸と半円状の金属軸の2軸を取り付けてあることです（写真1）。

資料自体は、真鍮^{しんちゆう}で作製され、盤内の中央にある羅針を支える軸受けは、測定精度を高めるために、水晶が使用され（写真2）、周囲には「東西南北」及び目盛が刻まれています。

裏面を見ると、端に「江戸（江戸）住 規行」（写真3）と刻字されており、この「規行」という人物は、大野弥三郎規行の事です。

大野家は代々江戸幕府暦局御用時計師で、規行は、父である大野弥五郎^{おののりさだ}規貞とともに優れた時計師であると同時に測量器械師でもあり、伊能忠敬^{おののりさだ}の測量器機を作製したことからその技術の高さを窺い知ることができます。

この資料が小田家に伝来してきた由来は分かっていませんが、代々、村の庄屋や手永会所の役人を務めた家柄ですので、村や手永会所で使用していたものかもしれません。（堤将太）



写真1 穹窠羅針

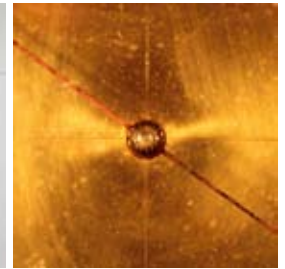


写真2 軸受け部分



写真3 製作者名

No. 222
植物

オニバス *Euryale ferox*（スイレン科）

池や河川などに生育し、やや富栄養化した環境を好む水草で、時には直径1m以上にもなる円形の葉を水面に浮かべる大型の浮葉植物です。葉柄や花柄、葉など植物体全体に鋭いトゲが多数あることがオニバスの名の由来です。とても大きくなる植物ですが、春に種子が発芽するとまたたく間に成長し、夏から秋に開花結実すると枯れてしまう一年生の草本です。また、発芽してすぐの葉は細く沈水性ですが、成長するにつれやじり形、ほこ形、円形と変わるとともに浮葉性となります。このように葉の形が変わる性質を異形性といいます。

花は紫色の花弁を持ち、時に葉を裏から突き破って水面に出て咲きます。この水面上に咲く花（開放花）とは別に、水中で自家受粉をする閉鎖花があり、閉鎖花の方が結実も良いそうです。

オニバスが好むような水辺環境は、開発などによる変化が多いため、オニバスはだんだんと減少しています。そのため、環境省のレッドデータブックでは絶滅危惧II類（VU）、熊本県の保護上重要な野生動植物リスト-レッドリスト2014では絶滅危惧IA類（CR）に選定されています。（前田哲弥）



写真1 オニバスの生育状況（昭和33年：熊本市）



写真2 オニバス（成葉）の押し葉標本

No. 223
地学

よしのそう
芳野層

熊本平野の西にそびえる^{きんぼうざん}金峰山（一ノ岳）は、^{ひしがた くぼち}金峰カルデラと呼ばれる一辺約3kmの菱形の凹地にできた火山（中央火口丘）です。そして、今からおよそ40～50万年前、金峰山がまだできていなかった頃、この金峰カルデラには湖がありました。どうして湖があったとわかるのでしょうか？

金峰カルデラ内の熊本市西区河内町岳から松尾町平山北部にかけて、主に泥や砂でできた地層が所々で見られます。この地層は芳野層と呼ばれており、湖で^{たい}堆積してできたものです。このことから、この一帯は湖であったことがわかります。



写真1 芳野層（右：西区松尾町平山、左：西区河内町岳）

写真1を見てみると、泥の細かい^{しまじょう}縞状の層（^{ようり}葉理）が発達してパームクーヘンのよう

な模様になっており、間に砂岩や凝灰岩（火山灰でできた岩石）を挟んでいます。この^{しまもよう}縞模様をよく見ると、白っぽい部分と濃い色の部分との組み合わせでできているのがわかります。この模様が残っているのは、周りから流れ込む川が無く、湖底では酸素が少なく生物がいなかったため、流れや生物によって湖底がかき乱されなかったからだと考えられます。

芳野層は、保存状態の良い化石を多く産出しており（写真2、3）、植物化石や花粉化石の種類から、芳野層堆積時の植生や気候がわかっています。当時はブナ主体の落葉広葉樹と^{こんこうりん}針葉樹の混交林よりなり、現在よりも冷涼な気候でした。気候を詳しく見てみると、寒冷化から温暖化、再び寒冷化と変化しています。

芳野層が堆積した湖は、最初は火山活動の影響を受けていましたが、火山活動が収まると水量が安定した湖となりました。しかし、^{ふんしゅつ}金峰カルデラ内に溶岩を噴出した火山活動が起こると、やがて消滅しました。（廣田志乃）



写真2 ブナの葉

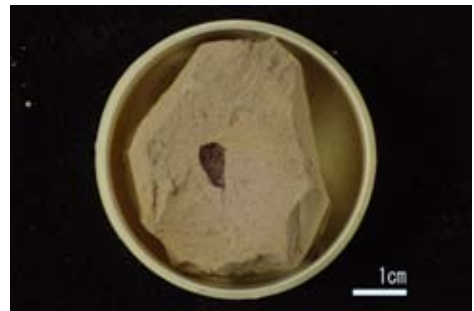


写真3 ハリモミの種子

熊本県博物館ネットワークセンター

〒869-0524 宇城市松橋町豊福 1695
TEL 0964-34-3301 FAX 0964-34-3302
Email hakubutsuse@pref.kumamoto.lg.jp
HP <http://kumamoto-museum.net/kmnc/>

[公共交通機関]

九州産交バス 松橋バスターミナルより宮原経由
八代市役所行き「希望の里入口」下車
徒歩3分

J R 松橋駅より約3km

